
勇者を旅に出す理由

いちあど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の旅に出す理由

【Nコード】

N8577V

【作者名】

いちあど

【あらすじ】

ドラクエ等の王様が何故跡継ぎ的な関係で大事な筈の一人息子を勇者として魔王退治というなんか確実に戻って来れなそうな旅に出すのか。

勇者が旅に出るまでの息子勇者と父親王様の話。

現在、魔王によって世界の半分が支配されていた。

今日も多くの国で兵が出され、魔王撃墜を狙っているらしい。

しかし、親父曰わく魔王を倒せるのは勇者のみだとか。

俺は小さなころから「お前は井戸の中で拾った勇者なんだ」と言い聞かされ、鬼のような教育を受けて育ってきた。

せつかく勇者なんだから魔王倒して見ろよ、折角の才能が持ったないし。」と

意味が分からない。

俺は勇者だとか、魔王だとか、そんなのどうでもいい。

ぶっちゃけ今、俺が本当に倒したいのは…

「俺が行くぜ！ 魔王退治！」

「おやめ下さい王様！」

王というクソ親父だ。

「なんだと？ 俺様を止めんのか！？」

「当たり前です！」

「何故だ！？」

「考えてみて下さいっ！ 一体どうやって倒すおつもりなのですか！？」

「む…。気合いでどうにか」

「どうにもなりません！」

言い争う親父と左官をただ見つめる。

「大体王子様がいるでしょう！　王子様でいいではありませんか！」

「なんだと！　俺様の大事な一人息子をなんだと思ってるんだ！？」

「なんの為の英才教育だったんですか！？」

「お前忘れたのか？　ははは、馬鹿だなー。魔王退治のためだろ？」
「王様……」

ああなんて面倒な奴なんだ本当に。

黙り込んでしまった左官。可哀想に。

「ちつ、しゃあねえな。じゃあ息子、お前行ってこい」

急に話を振られた。

その毒消し草、取ってくれのノリで。

「命がけの旅だというのになんつー言い方だ……」

「どうせ死んでも生き返るじゃねえか。勇者なんだから」

「それを言うなっ！　禁句だ！」

「面倒なガキだなーお前」

「てめえに言われたくねえっ！」

「俺様、ガキじゃないもーん」

「うぜえ……」

「親に対して何という言い方だ！」

「うぜえっ！　クソ親父！」

「あーあ。反抗期か……。昔は可愛かったのにな」

「王様、話を進めて下さい」

「えーつまんねーなー」

復活したらしい左官に促され渋々と背筋を伸ばす親父。

急に真剣な表情になった王につられ、俺も背筋を伸ばす。

「そなたに魔王退治を命ずる。行ってくれるな？」

「はい父上、魔王退治承知いたしました。とはいえ、この布の服でというのは流石に厳しいと存じます」

「俺様のガキなら裸一張羅でやれる」

「クソ親父め！ 無理だから！」

腰にあった木刀を思い切り澄まし顔の親父に投げつける。

せつかく人がそれっぽく言っただけというのにムードを粉末状に、マ
イクロサイズにぶち壊された。

「王様…、せめてもの慈悲を出して差し上げて下さい」

「しゃーねえなあ」

左官の溜め息混じりの言葉に、親父は後ろで気配を消して立っていた侍女に左手で指示を出す。

指示を出された侍女がとても面倒くさそうに宝箱を俺の前に3つ並べていく。

なんかこの城、もう終わってると思う。

「ここに宝箱が3つある。この城の財産の全てだ。好きな物を持つてけ」

なんと！ ちゃんと準備してあったのか！

驚きと共に恐怖を感じる。

明日はスライムが… いや、バブルスライムが降ってくるに違い

ない。傘を持って旅に出ねば。

「じゃ、これ貰うわ」

動揺はしたが貰えるもんは貰う主義だ。遠慮なく、さっさと開けて中を確認する。

ぬののふく

ひのきのぼう

3 G

宝箱ごと投げ捨てた。

「これでなにをしろと!？」

「ははははは」

「ははははは… じゃねえよ! ていうかまだ木刀の方がマシじゃね!？」

「おいガキ、ひのき舐めんなコラ」

「ならせめてっ! ひのきを木刀に加工しろよっ! 防具だって今着てる奴の方がまだマシじゃねえかよ!」

「そう、大丈夫だ。お前は常に腹黒という名の鎧を着てるから!」

大体、腹から肩あたりまで黒い物を着ています。

防御力：8 r 9 6

「そんじょそこらの鎧など訳ないわ! ふははははははっ……と言
うとも思ったか!? てか r てなんだよっ! 息子を腹黒呼
ばわりすんな!」

「んじゃ、その辺の民家のタンスとかツボから探してくれ」

「最低な王だな teme は!」

「何を今更！ 当たり前だろうが」

「威張るな！ そしてマトモな物を寄越せ！」

「ったく、わがままな奴だな。じゃあこっちにするか？」

親父はまだ閉まっている宝箱の一つに手をかけた。

そしてゆっくりと開ける。その中には、ぬののふく、ひのきの…

「って中身さつきと同じじゃねえか！」

「そのとおり。なんと中身は全部同じなのだ！」

「選ぶ意味がないだっ！？」

「ドキドキしたろ？ 流石俺様。考えることがナイスだぜ」

「あんたは一人息子をなんだと……………」

布の服を広げ、懐かしい表情を浮かべた親父に思わず言葉が詰まる。

先ほどとは別人のように、穏やかに語り出す。

「……昔な、俺様が旅に追い出された時はこの装備だったんだぜ。このおかげで俺は心身共に成長出来た。」

「親父も旅に？ ……なんでだ？」

親父もこの理不尽な目にあつたのか？

俺は思わず遠くを見つめる親父の顔を見る。

「メイドに手を出したら、な。着替えする間もなく追い出されちゃった」

「最低だ…っ！」

「はははははは。本当は素っ裸で追い出されたんだけどな」

「最低だ…っ！」

「二回も言っなよ。傷つくな」

無表情に親父が言った。まばたきすらしない。
親父がまばたきした所は見たことないけれど。

俺、この人と血が繋がってなくて本当に良かった。

「でも真面目な話、先に出した兵達に金も物資も全部持たせちまつたから、後は呪われてる数々しかないぜ？ 俺様の嫁さんのティアラみたいな」

「なっ、てめ…！ 母さんに何をつけさせてやがる！？ くそっ！ てめえの身ぐるみ剥いでやる…」

「忘れたのか？ これ紙製だぞ？ お前が小さい時にチラシで折ってくれたんじゃないか」

「俺どんだけ手先器用なんだ！？」

自分の意外な才能に吃驚だ。
ふと親父が息をつく。

「そんなに防具が欲しいのか？ …仕方ないな。とっておきだぜ？」

親父は先ほどの布の服を綺麗に畳み、俺に差し出した。
まさか、これはただの布の服ではないのか？

息をのんで親父の次の言葉を待つ。

そして親父の口が静かに動いた。

「重ね着してけ」

「…もう親父が行けよ」
「おう！ よっしゃあ行くぜ！」
「王様っ！ おやめ下さい！ 王子様も唆さないで下さいっ！」

*

色々あつたが漸く城を出た。
ほんと疲れる。すでに薬草を食いたい気分だ。鎮静効果はあるの
だろうか？

オロオロとするモンスターにひのきの棒を向けてみるが、襲って
くる様子はない。
モンスター達のあの眼差しはむしろ……。いや、空しくなる。止
そう。

しかし、城を出たはいいがどうしろというのだろうか？
城を振り返り、見上げる。
所々ひびが入り、若干のまがまがしさを纏う見上げても、上が見
きれない程に大きな俺の自宅。
住み心地は最悪。風呂とトイレが地下にしかないし、隙間風は入
るし、雨漏りが酷いし、夜暗いし、無駄に廊下に行き止まりが多い
し。

…小さい頃は一体何度迷子になった事か。ちよつと油断すると毒
の沼に落ちたし。

考えれば考えるほど最悪かもしれない。
でも俺の家だ。ほんと、どうしろというのだ。
なんというか、無心で城を眺めた。

その時、突然だった。

小さな時からよく見かける… いや毎日見かけた青いぷるんとした雲状のものが木の陰から猛スピードで現れる。

それはスライム。

あまりの驚きで声が出ない。

スライムは躊躇なく、そのままマツハの勢いで俺に突っ込んできた。

9999のコンストダメージ。

一撃でやられてしまった。

いや、奴にやられるのは別に驚くことではない。しかしタイミングが意味不明だ。

俺は薄れゆく意識の中、そいつを睨んだ。

「なに…しやがる…クソ親父」

「んーまだまだだな。もっと鍛えて出直してこいや」

出直すも何も今出たところだ。

大体、テメエは外を彷徨くんじゃねえ。

*

「おおゆっしやよ、しんでしまうとはなさけない」

青くぷるぷるとした奴と目が合った。

親父で王様。ただし王は王でも魔王。

なんだこの見た目とのインフレ。世の中間違ってる。

「クソ親父め！ なにしやがんだ！」

「魔王が勇者を倒すのは当たり前だろー？」

「勇者が魔王に倒されるのが当たり前じゃ人類の未来がねえじゃねえか！ 俺まだ魔王城に入ってすらなかったのに！」

「いつも入ってるじゃねえか。なあ？」

「俺ん家だから！ ここ俺ん家でもあるから！」

左官はただ無言で汗を流している。

「大体みんな、俺を襲いにくそうに遠目で見てたぞ！ むしろなんか暖かい眼差しで見守られてただけど！」

「勇者の魔王退治、題名“はじめてのおつかい”」

「何てことを言うんだ…っ！」

「子供が父親の背中を越えて一人立ちすんだぜ？ そりゃ生暖かい眼で見守りたくもなるぜ」

「生暖かい言うな！ 俺は越えるんじゃないやなくて蹴り倒そうとしてんだよ！ ていうかテメエ暖かく見守りたいなら何故襲ってきたんだ！」

「俺様の城の周りで勇者がぼーっとしてたからさー。思わずこうサクツと…」

「サクツというかズドスアツて感じだったから！ てめえそれでも親かつ！？ 俺をなんだと思ってるんだ！」

「勇者ホイミンだろ？」

「誤解されるような事言うな！ 俺は人間だっ！ あんたと同じ扱いすんなポヨポヨ！」

「ガキが！ 俺様はポヨポヨではなくぷるぷるだ！」

「激しくどうでもいい…っ」

「まだガキには俺様は早いな。出てけ！ 修行して出直してこい」

！」

「黙れクソ親父っ！ 言われなくてもそうするわ！ もう帰ってこねえからなっ！」

「ああそうかよ！ じゃあ帰ってくんな！ガキが！」

「てめえは大人しく城に引き籠もってやがれクソ親父っ！」

「はっ！ ガキに言われる筋合いはねえっての！」

*

暴言を飛ばしながら出て行った息子を見送る。

再びあのガキに会える日は来るのだろうか。

いや、来る。絶対にだ。

「よろしかったのですか？」

左官がそつと横に並ぶ。

「直に人間が攻めてくるだろうしな。ああでもないとなかなか離れねえって。なんだかんだで此処に依存してるからな、アイツは」

だがここにいたら、間違いなくアイツは人類の敵と判断されてしまっただろう。

アイツを人の敵にはしたくない。あのガキは人間で、人類の味方の勇者なのだから。

「たまには俺も王妃と一緒にゆっくりしてえしな！。それにはあのガキんちよ邪魔なんだよ」

「…それが本音で御座いますか？」

沈黙。

「どうするんですか？ 王子が本当にあなた様を倒しに来られたら」

俺を倒したら、アイツは英雄として将来安定だろうな。

頭の上のチラシで折られた王冠。

俺様はキングスライムじゃねえってのに。

ふっと笑みがこぼれた。

「まあ、…それもいいんじゃないか？」

「ははあ、王様はどMでしたか」

「ちげえわ！」

いつものように左官と軽口を叩き合う。
いつもと変わらないように。

「…王様も、丸くなられましたね」

「はあ？ 俺様はいつだって軍型だ」

「違いますよ。性格の事です」

「あー？ そうか？」

「はい。かなり」

「お前も、だろ」

「…そうかもしれませんね」

本当にどうしてこうなったのか。

アイツを拾ったのは、勇者を利用する予定だったからなのに。

「まあ、流石は勇者といった所じゃないでしょうか？」

「はんつ。勇者にしちゃあまだただけだな！」

少なくとも、俺様の一撃でノックアウトされてる内は駄目駄目だ。
長い旅をして勇者というのは強くなるものなのだろう？

…いつの日か、俺様を一撃でノックアウトさせる日が来るのだろうか。

「勇者か…。つたく、生意気なクソガキだ」

さあ人間達が来る。戦いの準備をしなくては。

俺様は勇者にしか倒せない。

俺様は勇者以外には倒されない。

俺様は勇者以外に倒れる訳にはいかない。

あのガキがいつか…俺様を、魔王を倒しに来るのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8577v/>

勇者を旅に出す理由

2011年9月8日17時02分発行